安住寺だ

ょ

n

第143号

発行 安住寺 (年4回発行) 臨済宗南禅寺派 大分県杵築市大字南杵築379

₹873-0002 Tel 0978-62-2680 URL http://www.anjyuji.net

編集 矢 野 印刷 安 住

平成25年 棚経日程 猛 総責責住 平 任任 成 暑 木 錦江、下原、下下司 8 日 役 役 代員員職 お 金東下司迫上、迫下、安心院町、大分市 + 9日 川矢矢 見 10日十一西新町、古野、弓町、天満 年 上 野 野 八 舞 ま 11日日 日 南台、煙硝倉、西上、北台、杉山、札ノ辻 盛 玄 明 12日月 別府市、魚町、本町、谷町、錦城、北浜 す VI 13目火 新興、東大内山全戸、藤川全戸、丸尾 浩 徳 玄 月 西大内山全戸、永代橋、鴨川、中ノ原、守末

本年度は、上記日程にてお参りいたします。お昼に 初盆供養や仏事もありますので、時間のお約束はで きません。11・13~15日は三人、他は二人で参ります。 ご不在とかで、どうしても都合の悪い場合は連絡し て下さい。可能なかぎり、調整いたします。

菊本、須賀

桃山、宗近、中平、本庄、宇佐市

日出町全戸、国東町、安岐町、守江、茅場

لح のいは迎ま さ う れさ平思 B 初え 家 し るれ均い が 盆 る とた的ま あ 近 で ŧ は 思方なす。 لح る 所 多 お لح いは寿 に な で < 盆 言 は L \mathcal{O} 命 11 0 誰 ょ 家 時 う 何 が で う。 方 ŧ 軒 で 期 人 初に 他が 生 ŧ か 知 方納を 1) 多 初 自 盆な 得 全 い盆 合 宅 を

てにな年

お 八 お 参 月三 り ح 0 方

日 九 お 時 土 き + \mathcal{O} 八 時 時 間 時 を ょ 半 決 よ 8

下

さ

11

地

区 世

話

さ

W

経

由

て

お

知

5

せ

14日水

15日木

施食会は会費等不要です

会表

お

せ

が

め果な大よ考り方遇かわし盛 しまかで ば が かに う 故ろ供 げ ょ れ 0 な う う う < 養 方 人 に \mathcal{O} もか す で べ そ お 成 遺 祈 仏 皆 は 族 そ き 皆 n で が な もの で で 申き 諦結は盛の

土

退せれる締除 さ

N \mathcal{O} 致 方 頂 長 さ植 れ 年 木 1 W 任 ま ま感 たお が文 に す謝 お 努 就 は を X 任 郎

褝

会

第

2

4

支

部

長

えまはな 7 大 方 る若 な ŧ Ļ せ 決 に 諦 をな T 死 あ ん 見 に げ 初 し そ で \otimes L れ て 方 \mathcal{O} ょ 盆 が た 良 少 を ょ ょ う ば \mathcal{O} 0 さ う う。 と < な 供か合 そ ょ < れな は 養 ず 思 < あた不し を

事 故 不 遇 で な 亡 と死 し席り、 た松浩士総

責た。 本さ谷 代 上 六 文んさ で \mathcal{O} 任 次 辞 月 λ 綾 役 両 新の 部 員 令 九 日 氏 総後 昇 \mathcal{O} \mathcal{O} が代任 吉 土 交 \mathcal{O} 付 決 就にに さ 谷 が 任は総 岩 算 W 行 報 さ西代が治 告 れ正 の 退 わ ま文川任 れ 会 上 ま \mathcal{O}

員 部 に 代

さ

あ

お 盆

を

考

る

て嫁を寝かせません。 あげたい、こうしてあげたいと言っ なく、息子が帰ってから、ああして 奉公に出した亀吉が三年ぶりに帰っ てくるので、 一代目三遊亭金馬の落語では、 「薮入りや何も言わずに泣き笑 父親は朝から落ち着き 丁稚

卵を炒って、 ラも買ってやれ。 れて行きたい。ほうらい豆にカステ に軍鶏に、鰻に天婦羅に寿司にも連 温かい飯に、納豆に海苔を焼いて、 汁粉を食わせて、 刺身

いな~。そこまで言ったら、静岡、横須賀に行って、江ノ島、鎌倉もい れて歩きたい。赤坂の宮本さんから うな~。明日一日で・・・ 伊勢に参って、四国の金比羅山に、 海を見せて、羽田の穴守りに参って、 梅島によって本所から浅草、品川の 京大阪も回ったら、亀吉が喜ぶだろ 崎大師に横浜の野毛、伊勢崎町に おまけに、湯に行ったら近所を連 名古屋のしゃちほこも見せて、

思う親の人情を描いた噺です。 J薮入りで帰ってくる、我が子を

り」なんて言葉を知っている人は、 うなことはまずありませんし、「薮入 暇をもらって親もとなどに帰ること 昭和初期の人でしょうか。)七月の十六日前後に、主家から休「薮入り」とは奉公人が一月およ いま時分奉公に出るよ

> る賽日であるとされるようになる。 王が亡者を責めさいなむことをやめ この一月と七月は、地獄で閻魔大 いう。 七月の休暇は「後の藪 盆休みのことである。 入 ŋ

方がありました。 さて、 先日こんなことを言わ れる

なあ~」 けど、なかでん、 「おっさん、 2、お盆はよお解らん仏教ちや解りにき-

した。 り、施食会でお参りし、ほうずきをからお盆の時期が来れば、棚経に回 り・・・当たり前のことと思 手にしたお墓参りのかたを見、盆踊 く由来を考えることはありませんで ん~そんなもんかな?小さい時分 い、 深

に報告に行く。の行為の善悪を帳簿に記入し、三元 為を監督する神があり、一人一人に想がある、三元の思想では、人の行そもそも中国では道教の三元の思 生まれた時から五、六人の神がつい て監視されるという。毎日、その人

は「算」、 年崩増減される。 その寿命が三元の神の報告によって どんけずられていく。 百日(百二十年)与えられている。 した名札がある。 に、生まれた時から大体四万三千二 た名札がある。寿命は誰にも同様天上には人間一人一人寿命を記入 は悪い行いが多く、算か紀でどん 「算」、年単位を「紀」という。人 増減は日数単位の場合 寿命は誰

> 供 いえをし神の機嫌をとった。 !あたり一生懸命に祭事を行 特に中元の 七 月十五 日 は、 報告 お 日

その いわれが結びついた。 金した「仏説盂蘭盆経」 中元の思想と祭事に、 目連尊者 中国 で

成

そこで、どうしたら母親を救えるの されて苦しんでいると知りました。 て亡き母が餓鬼道に落ち逆さ吊りに 迦様は言われました。 かお釈迦様に相談したところ、 \mathcal{O} ある時、 目連尊者は神通力によっ お釈

ろう」と 養すれば母を救うことが出来るであ 侶を招き、多くの供物をささげて供 「夏の修行が終った七月十五 一日に僧



昨年の施食会 (配膳風景) 御加勢い頂きました方々に 感謝申し上げます。

きてわ 者に向 くの餓鬼を満たす陀羅尼を説き示さ さまは、僅かな飲食も無量に増え多 実行したいと思われたが、 る」と。そこで阿難尊者はなんとか び、我も又苦難を脱することができ 法・僧)を供養すれば汝の寿命はの 衆生に対して飲食を施し、三宝(仏・ 道にいる苦の衆生、 餓鬼は「それにはわれらの如く餓鬼 その難から免れる法を問うと、 ろう」というのです。 い自分にはどうすることもできず、 お釈迦さまに教えを乞うと、お釈迦 施餓鬼の法を教示せられた。 れと同じような餓鬼となるだ って「三 日 0 あらゆる困苦の 阿難は 財産の無 命は尽 警覧き、 その

至っているのです。 藪入りなども複雑に絡まって現在に 本に伝わり、 に行われるようになった。 鬼会(当山では施食鬼会) このようにして、 先祖崇拝の民間習俗 先祖供養と施 が、 さらに日 お盆

まる『開甘露門』があります。この「じゃじんにゅりょうしー」から始一施食会・お盆にます。 く、棚経や施餓鬼会に用いるために経典は単体のまとまった経典ではな がりません。 口語訳を続けて読んでも意味がつなであった「往生呪」なども並べられ、 様々な経文や、 浄土教系統の 陀羅尼

ですが経中の を読んで理解していただけれ 句 回 向 (修行祈 ば、

からは火を吐き、髪は無茶苦茶に乱

目は奥のほうに光る醜

い恐ろし

餓鬼であった。

その餓鬼は阿難尊

われた。やせ衰え、のどは細く、口と、焔口(えんく)という餓鬼が現

とり静かなところで坐禅しています

釈迦さまの弟子阿難尊者が夜、

ひ

対する施しの教えが加わった。

経」に説かれる、阿難尊者の餓鬼にさらに、「仏説救抜焔口餓鬼陀羅尼

われた。やせ衰え、のどは細く、

しつかり

143 号 お盆の行事の棚経 なあ~」とは言わせませんよ。 け 理解していただけるでしょう。 らど、なかでん、お盆はよぉ解らん 「おっさん、仏教ちゃ解りにきー 本来の意味・目的をし ・施食会に込めら

回 尚 (修行祈願偈)

此の修行の衆の善根を以 修 善

ほうたーぶーもーきーろうてー 答父母 劬 労労徳

父母の苦労の徳に報答せば

そんしゃーふーらーじゅーぶーきゅ 楽

もうしゃーりーくーさんなんにょう 存者は福楽にして寿極まり無く、

離苦生安養

亡者は苦を離れて安養に生じ

恩三有諸含 いんさんにゅうしー 識

さんずーはーなんくーしゅんさーん 四恩・三有諸々の含識も

途八難苦

倶蒙悔過洗瑕 三途・八難の苦の衆生も

倶に悔過を蒙って瑕疵を洗

じんしゅーりんぬいさんじんずー 廻生浄土

尽く輪廻を出でて浄土に生ぜん。

父母が生み育てて苦労された恩徳に報 この施餓鬼という修行の多くの善根で、

> を洗い流すことができ、尽く輪廻から脱 苦しんでいる衆生も、倶に懺悔して過ち 法と無縁の八種類の困難な状況にいて いう三つの悪しき途に陥っていたり、仏 含む諸々の含識や、地獄・餓鬼・畜生と る者は餓鬼の苦しみを離れて安養浄土 で寿命が尽きることなく、亡くなってい いるならば、生存しておられる者は福楽 に生まれ、また、上は国王や師友・檀越 人から、下は三界のものたちまで全てを (信者・施主) などの四種類の恩、ある



この問は、何を言わんとしたか私ても深く理解のある方でありました。 坐禅の修行も経験され、仏教につい いただいた方は、在家でありながら も考えさせられました。 実はお盆がよく解らないとお尋ね

妻の死後いったい何が残ったかとの 峰行を修めた、葉上照澄阿闍梨は、

1問自答に、死者への「想いが残る_

「深さ」が残る。

と言わ

されたことが縁で、比叡山で千日回

後にも存在し続ける常見の立場も否 断見の立場も、 ところの無我を説いています。 定・批判しています。 仏教は本来、死後何もないという 禅でも 自我への執着も離れた 常住不変の霊魂が死 「生死も無ければ涅 断 見 • 常見の

ました。

槃もない」と説き、 上人も「仏法は無我にて候」と言わ れております。 浄土真宗の蓮 如

感じています。 りにくいと仰ったのではないかと今 から離れていることが、 も生死への執着となり、 た人々を救うという、施餓鬼の儀式 りし供養することも、餓鬼道に堕ち 霊魂は残っていないはずであるの お盆に先祖の霊を迎えて、 〈お盆〉が解 仏法の本義 お祭

と申します。また、 「這えば立て 立てば歩めの親心」 「藪入り」の噺に表れる親心、 「薮入りや何も言わずに泣き笑い」 人情。

「かくばかり 偽り多き世

0)

中に

とが、自分が救われることであると 食会で他を救おうという心を養うこ しい大乗の慈悲行となるでしょう。 いう、同体の慈悲心を培い、素晴ら 報恩の供養も大切でありますし、 先祖はないでしょう。先祖に対する 子のかわいさは誠なりけり」 子や孫の幸せを願わなかった親、 最後に、若くして最愛の妻を亡く 施

る心は、この「想いの深さ」をいか に表わすかということが大切なので お盆を迎える心、 追善の供養をす

あります。 雛僧とは、 幼い僧・小僧のことで

たことでした。 日頃飲めないジュースを家々で頂け 参りしたのを覚えております。 始めの年は閑栖和尚に連れられてお なったのは、 下さいますようお願い申し上げます ております。どうぞ温かく見守って 和尚か、 何といってもオヤツを沢山戴き、 ところで、棚経の醍醐味は! 長男が小学一年となり、今年から 私が棚経にお勤めに上がるように 閑栖と棚経に回る予定にし 小学校二年生からで、

覚えています。 えると、3まも体重が増えたことを ある年などは、三日間の棚経を終



矢野玄悠(はるひさ)です。

よろしくお願いします。

今後も御指導下さいますよう、 育以前に、まだまだ自分の勉強不足 を読み返しておりましたが、 を実感することとなりました。 お願い申し上げます。 師弟同行で精進してまいります、 |み返しておりましたが、徒弟教||雛僧要訓』なる徒弟教育の基本 心よ

明玄合掌



一生只有看山梁 廣石碩田先生筆

南禅寺と伊勢神宮に参拝しましょう

11月11~13日 2泊3日

閑栖和尚と行く 南禅寺開山忌・伊勢神宮参拝 の旅 南禅寺では、法要の後精進料理を頂きま す。

⑥旅行の概要 11日朝杵築駅出発、新幹線利用 南禅会館又は大津市内のホテル泊、12日南禅寺 開山忌参拝、午後バスで伊勢市へ、伊勢神宮参拝 金剛証寺参拝、鳥羽市内のホテルに宿泊、

13日観光しながら京都へ移動、新幹線で帰る。 ◎募集人員=30名 ◎費用=8万円程度

◎参加申込は、8月中にお願いします。

◎8月末の人数で宿等の予約をし、バスや 費用、旅行日程等を確定します。

途中、南禅寺からの参加も可能です。

初盆会 今年 を迎える方々。

麻生品子様 大 府 市 99歳 江藤サツキ様 東大内山 96歳 江 藤 春 様 東大内山 91歳 沂 清原嘉人様 宗 84歳 是久チョコ様 西 下 司 94歳 幸 司 倉 原 煙 硝 56歳 宮惟俊様 野 87歳 片 町 原 96歳 H Ж 是久サダ子様 南祇園 92歳 原正美様 東大内山 94歳 河野タナ子様 東大内山 80歳 江口トシエ様 沂 宗 89歳 東大内山 江藤英一様 59歳 フミ様 西 新 町 88歳 徳 山 炫 浩 様 錦 城 91歳 直井成子様 熊本市 78歳 得能起世士様 天 満 86歳 江口正孝様 宗 近 66歳 渡辺千代子様 78歳 東大内山

謹んでお知らせし、皆様と共に、 ご冥福をお祈り申し上げます。



Ł 大 子 藤 タ 廣は て ブ 合 寧 会 原 開 石 日 催鹿 司 寺 員 宏 須藤 安 支が 須 (美 原住 2 奉 部 賀 Ł 寺 矢 n 息 会 加 野 廣 3 サ か ま 諸 市詠 桂石 Y 富 \Box Ò に

会 独 独 秀 秀 流 去流 る 開 五 五流 十 月 五 周 八 +玍 H 周 年 記 九 記 念 念 大 全 児国 会 奉 出

のる加坐観 方場で禅音 は合き会講禅 おもまとは 会 問あす同午 °様後 合ま都に わす合 時 せのにどよ よなり りた い初変で写 め更も経

九 九 九九 八 坐 月 月 月 月 月 +中 六 下 + ti 旬 日 日 H 写 毎 経 月 Ξ, 写 敬 第 詠 坐 歌 禅 詠 老 第 詠 観 四 歌 슺 歌 音 土 休 講 曜 H.

行 事 予 定

安住寺境内墓地

願 な墓 9 地七 て Ø 地 持 八 管 ٧V 会 ま ま 理 月 理 す 料 は 料 O 0 ょ 納 お 付 願 時 Ł < 期 境

> ćţ, Ł 内

大